

風俗画と美人画

2019年8月10日(土)～9月29日(日)

日本における風俗画は、近世初期に多く描かれるようになり、それに続けて単独の女性を描いた美人画が盛んに制作されました。そして、江戸時代中期には浮世絵として多くの人々に親しまれるようになります。太平の世に花開いた風俗画と美人画の世界をお楽しみください。

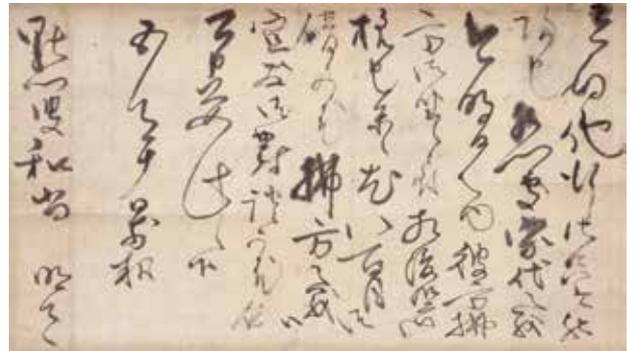


重要文化財(潮干狩図) 葛飾北斎 江戸時代・19世紀初期 本館蔵(中島小一郎氏寄贈)

天上超脱の書 —江戸の四僧—

2019年8月10日(土)～9月29日(日)

大阪中之島美術館所蔵の山本發次郎^{やまもと ほうじろう}コレクションは、佐伯祐三の絵画などで知られますが、山本が愛してやまなかったのが、江戸の高僧たちの書でした。そのなかから寂巖・慈雲・明月・良寛の名品を展示いたします。



《黙叟和尚宛消息》明月 江戸時代・18世紀 大阪中之島美術館

油絵祭り2019 —静かに成長する洋画コレクション—

2019年8月10日(土)～9月29日(日)

商都として栄えた大阪はかつて関西洋画の中心地でもありました。昭和11年の開館以来、当館ではさまざまな美術団体の展覧会を開催するとともに、日本洋画の収集を進めてきました。常設展史上まれにみる、にぎやかな油絵祭りをお楽しみください。



《教会》佐伯祐三 大正13年(1924) 本館蔵

よそおう —化粧道具—

2019年8月10日(土)～9月29日(日)

古より「色の白きは七難隠す」という諺があるように、これは江戸時代の女性にも存在した美意識であったようです。当時は、白粉をはじめとする化粧の慣習が一般にも広がり、様々な形状の化粧道具が生まれた時代でもありました。紅板と称する携帯用のリップパレットが登場するのもこの頃からで、蒔絵・象嵌などで美しく装飾され、重宝されました。本展示では、江戸時代の化粧道具を中心に紹介いたします。



《菊木地蒔絵紅板》(身部分) 江戸時代後期～明治時代初期・19世紀 本館蔵(カジュアルコレクション)

よそおいをうつす —和鏡—

2019年8月10日(土)～9月29日(日)

鏡は人の姿を映し出し、化粧や装いに用いられます。鏡の背面には文様が鑄出され、その時代の世相や文化が映し出されます。ここでは平安時代から江戸時代にかけて日本で製作された鏡を紹介いたします。装いの文化を映し出す和鏡の世界をご堪能ください。



《青銅 亀甲双雀文鏡》
室町時代・15世紀 本館蔵